

「ふつう私は小説家として暮している。ここ五年ほどは湘南海岸の茅ヶ崎市である。海岸から三百メートルか四百メートルほどのところでひっそりと起居している。月曜日と木曜日の夕方になると二キロ離れたところにある水泳教室へ行くために外出するが、それ以外はほとんど家にたれこめたきりである。」(「国境の南」から)

作家開高健は1974(昭和49)年に茅ヶ崎市東海岸南のこの地に移り住み、亡くなるまでここを拠点に活動を展開されました。その業績や人となりについていただくことを目的に邸宅を開高健記念館として開設。書斎は往時のままに、展示コーナーでは、期間をさだめてテーマを設定し、原稿や愛用の品々を展示してまいります。これらを通じて、たぐい稀なその足跡を多くの方々にとどめていただけるなら幸いです。



庭にある「哲学者の小径」



湘南海岸にて 1982年

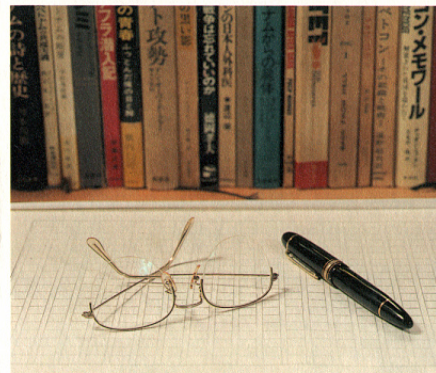


1968年頃

明日世界が
滅ぶるときも
今日、あなたは
リンゴの木を植える
開高健



書斎の壁を飾る剥製



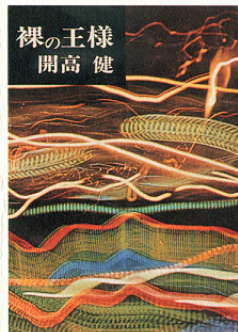
専用の原稿用紙と万年筆、眼鏡



自宅書斎にて



银山平・村杉小屋にて 1970年



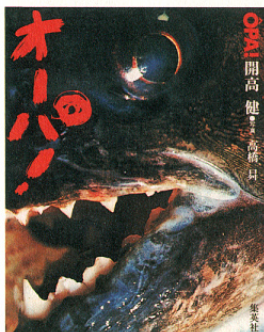
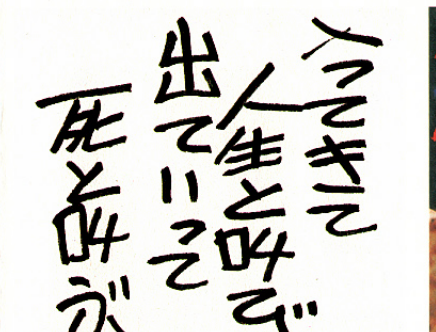
『裸の王様』(1958年) 文藝春秋新社



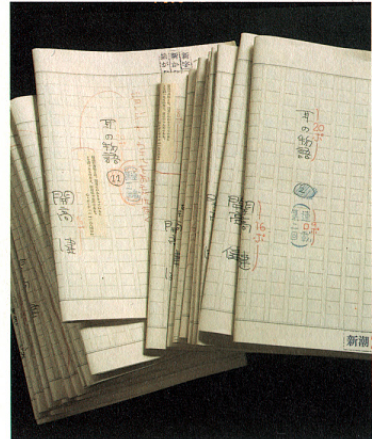
1959年



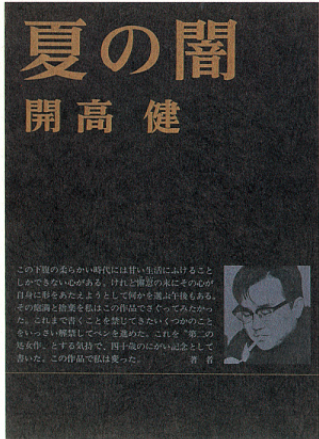
『ベトナム戦記』(1965年) 朝日新聞社



『オーバ!』(1978年) 集英社



『耳の物語』の原稿



『夏の闇』(1972年) 新潮社



1958年



1964年頃



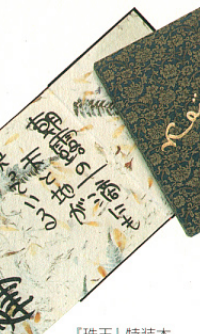
ベトナム取材 1965年



『輝ける闇』(1968年) 新潮社



『ロマネ・コンティー一九三五年』(1978年) 文藝春秋



『珠玉』特装本 (1990年) 文藝春秋